

大学で学ぶことの意味を考える ～大学とキリスト教との関わりをたずねて～

中村 邦介

はじめに

2001年度から「立教科目」の1つとして始まった「大学とミッション」を担当することになり、当初私の頭に浮かんだことは、一時話題になった立花隆氏の「知的亡国論」などに提起されていた問題だった。つまりそれは、日本の高等教育のシステムが崩壊現象を起こしており、単に「学力低下」というだけの問題ではなく、現代における知性のあり方が根本的に問われている、という指摘である。確かに現今の大学教育において、ますます切実に求められていることは、学生が「学び方」を学ぶという課題である。立教大学がまさに「全カリ」として新しい教養教育(リベラル・アーツ)に挑戦しようとする意図も、おそらくその辺りにあるのではないかと私なりに推測した。しかし仮にこのような問題意識を共有できたとしても、果たしてそれをどこまで具体化できるのか、私には至難の業のように思われた。

ただ私の念頭には、幾つか受講生に期待するところもあった。それは、(1)学生に一定の知識を提供することをこえて、何らかの形で「学ぶ」ことの動機づけに関わるような点に可能な限り触れてみたい。(2)大学の成立や変遷をキリスト教との関わりから考えることによって、その結節点を通して改めて「学ぶこと」の意味を自覚的に捉え直して欲しいこと。(3)立教大学という場で「学んでいる」ことの意味を、在学中に改めて考えてもらおう。これら

のことが、受講する学生に対する私の密かな願いというべきものであった。

授業の概要

授業の基本的なテーマの流れは以下のとおりである。

1. 学ぶことについて：知ることと考えることの意味
2. 経験と学び：知覚の転換を中心に
3. 西欧社会における教育の源流について：キリスト教との関わりにおいて
4. 大学成立以前の教育：古典ギリシャ・ラテン的教育の意味とその継承
5. 西欧における大学の出現：その成立の背景
6. 大学の展開：その内容と特質
7. 大学の変質：国家と教育とのかかわり
8. 大学と近代世界：近代科学の影響と「世俗化」をめぐる
9. 大学の新たな局面：専門化時代の到来
10. 近代日本と大学：立教大学の歴史的背景
11. 課題としての大学教育：求められている知性とは何か

導入部では、主として<学ぶとは何か>をめぐる、学びの技法や知ることと考えることの意味を様々な側面から考えた。それは、学習者の段階から学問をする主体となることへの導入教

育である。

前半部では、西欧社会における教育(文化)の源流として、特に大きく二つの流れ～ギリシャ・ラテン的な教育とヘブライ・キリスト教の伝統とを対比しながら、それらが人文教育(Humanistic-Technical Education)と「導入教育(Inducting Education)」、「導入教育(Inducting Education)」あるいは学知(Scientia)と英知(Sapientia)として追求されてきたことを探求した。キリスト教と教育とのかかわりについて言えば、ローマ帝国のコンスタンティヌス大帝によるキリスト教の公認以降、社会的にキリスト教が教育に深く関与することになり、ギリシャ・ラテン的な文化の継承者としての役割を担った事情を辿った。その結果、キリスト教は「伝統(歴史)」「文化(現在の経験)」「個人」「共同体(社会)」の四つの視座の中で、人間形成のための座標軸の構築に向かうことになる。

次は、大学の成立以前をふりかえり、古典ギリシャ・ラテン的な教養(リベラルアーツ)の継承者として、三学(Trivium)四科(Quadrivium)の自由七科の伝統が修道院や大聖堂付属教育機関を通して教えられ、広く西欧中世の世界に伝えられ保持された歴史を学んだ。自由学芸七科の目的は、理解(発見)・解釈・表現を土台として、どのような問題についても、問題を見たら筋道を明らかにして判断し、発信できる点にあったことに注目した。更に「大学」の歴史をテーマにして、大学の成立の背景、特に革新時代と言われる12世紀の時代背景の中から、自由な自発的な結社としての大学の誕生が起こったことを探求した。大学の成立について、キリスト教による影響を考えれば、大学の専門科目としての神学・法学・医学を中心にして、たとえば個人の心理(意向や動機)への関心やイスラム文化の西欧世界への導来という新

たな知的な状況にも及んでいる。ここから西欧社会に出現した大学の内容や特質を扱い、その誕生は「建築物」としてではなく、何よりも「都市」に集まった外来者による自由な自発的結社(Universitas, Collegium)であったことを学んだ。さらにその特質は、ボローニャやパリ大学に見られるように極めて全ヨーロッパ的な大学として、今日的な表現で言えばラテン語を公用語としたグローバルな性格を有していたことを追認した。またそのようなことを可能にした当時の普遍的な権威としてローマ教皇の存在を捉える。

後半部では、ルネサンスとリフォメーション(宗教改革)という全ヨーロッパに波及する革新的運動に触れながら、やがて人間の自律的な文化を基盤にした近代の大学が形成されていくこと、また国家的な原理が大学に大きな力を及ぼすことになる事態を考えた。また17世紀の近代科学の誕生は科学への強い関心を引き起こし、学術協会という大学の外からの知的協働体が大学に影響を与えていくという興味深い経緯を辿った。やがてそこから西欧社会が直面する「世俗化」という大きな歴史的現象は大学に如何なる影響を及ぼしたのか、またそれは人間の認知構造にどのような変化をもたらしたのかを検討した。続く18世紀の近代産業革命は人々のライフ・スタイルを激変させ、そして社会は建築士、会計士、技術者などの新しい職種(専門家)を必要とするようになった。それゆえこのような専門化時代の到来によって大学は、新たな専門家を要請すべく新しい大学の創設に向かった。とくに英国の大学の例を取り上げて、新制大学の新しい局面を学びつつ、このような専門化を支え、補完していく教育システムについて考えた。

最後は、近代日本の大学の誕生を振

り返り、立教大学について日本の大学教育の目指したものの関連において、その成立の背景や教育の特質を考察した。また「大学とミッション」というテーマに立ち戻り、特にミッションの意味を考え、大学で学ぶことの意味は課題の中で学ぶことであり、それは絶えず自己相対化に根ざしながら普遍的な真理を追究することであることを確認する。そして人間中心主義の認知構造を脱却するような、いわば「逆遠近法 (Outside-in)」が、様々な分野で新たな知性として求められていることを学んだ。

授業の実際

「大学とミッション」は、タイトルから明らかなように建学の精神や理念に基づく大学教育をテーマにしているが、予想以上に漠然として焦点が絞りにくい科目であった。実際に授業を担当してみると、担当者も受講者の側もそれぞれこの科目に対する様々なイメージがあって、それらがときに認知的不協和音を起こしやすく、そのために度々軌道修正を行いながら授業を続けざるを得なかった。特に受講生の多くはキリスト教について一定の知識をすでに得ている人々ではないので、できるだけキリスト教についての前理解なしにも分かるような授業の展開に配慮した。そのためかキリスト教そのものに強い関心を持って受講してきた学生にはもの足りなさを残したかもしれない。また非常に大きなテーマを毎回のように掲げて提示したために、果たして学生はそれらを理解できたのか、また内容的に首尾一貫して授業が展開できたのかについては、大いに悩んできた（今もそうである）。

ただ毎回授業の最後に受講生から「リアクション・ペーパー」を提出してもら

い、それに基づいて講義を展開できたことは幸いであった。学生がどこで大きな誤解をしているかは勿論のこと、学生の疑問点や見解について非常に明確に知ることができた。当初受講生と直接対話しながら授業行おうとしたが、現状ではやはりそのようなやり方に彼らは不慣れなためにうまくいかなかった。しかし「リアクション・ペーパー」の方法は、大勢の人の前で発言するという心理的な負担が軽減されるのか、受講生は非常に熱心に応答してくれた。少なくとも授業の始め15分～30分位は、これらの受講生の疑問点や意見を紹介しながら、それらに対する私のコメントを述べた。これらの作業は、授業の付け足しなどではなく、授業の内容を一層膨らませて深化させ、時には修正させるものである事を毎回痛感させられた。

全カリについて

私の見当違いであればお許し頂きたい事であるが、現在の体制において学生は自分の関心に基づいて全カリの授業を選択しているとすれば、そこから更に履修上踏み込んだガイドラインを設ける必要はないだろうか。要するに、全カリのカリキュラム全体を立教大学が構想するリベラル・アーツの目的に即して編成し、受講生にある程度定められたカリキュラムに基づいて学んでいけるような体制を設定することである。たとえば最近の「生物学」などに見られるような科学的見識に接することは、現代を生きるすべての知性にとって基本的なものとなるだろう。特に原理的な思考を鍛えていく教養的思考を習得しておくことが重要である。そのためにも全カリは、現代の教養教育とは何かを先取して、カリキュラム上の工夫を積極的に構築して頂きたいと期

待している。

なかむら くにすけ
(本学兼任講師)